

一兵士がみた日本海軍はなぜ敗
北したか？

koberyo1

勝海舟は歴史を動かした、異端の貧乏旗本の一人である。海舟の眼は、つねに海外にむけられていた。幕府で海軍が必要、との考えが芽吹くと、すぐさま長崎に海軍伝習所をつくった。オランダ海軍の教官からその詳細を伝授され、貧乏旗本の御家人、海舟は日本海軍の基礎を構想するようになる。

安政2年、1855年から気力と体力が充実した海舟は、一一23歳から37歳にかけての時期であったが、この間、海外からの情報を知り、さらに調査も行い、幕府も海軍だったら海舟に相談せよ、という信頼が生まれる。

万延元年、1860年の1月13日、海舟は咸臨丸（かんりんまる）を指揮してアメリカに渡る。日本人が初めて太平洋を横断する大航海であった。そして文久2年、1862年、40歳の海舟は軍艦奉行に就任する。

坂本龍馬は勝海舟をたずねて行って大いに議論しあい、結果、海舟に敬服し、弟子になるが、その後、暗殺されてしまう。勝海舟は一人で、日本海軍の青写真を描きつづけるようになるのだ。

日本海軍は明治元年、1868年に創設され、昭和20年、1945年に消滅するまで、人間にたとえるなら78歳の生涯を生きていたことになる。

その間、日本海軍の飛行兵は多くの困難をへて、手探りで後進を育成してきた。この方法は「OJT方式」と呼ばれている。OJTとは、on the job training で先輩が後輩を教えるといった教授法であり、日本海軍はその方法を採択してきたというわけだ。

主に躰（しつけ）教育が中心であったが、この78年ものあいだには事故があったり、野球でいえばコーチが不足し、即実戦という場面が多かったように思う。

教育は時間がかかるもので、その単純なことを終戦間近の日本海軍では忘れられつつあった。いや、しようと思ってもできなかったに違いない。

私は昭和19年7月に甲種飛行予科練習生として横須賀通信学校に入隊した。

辞令では土浦海軍航空隊に入隊を指示していながら、あろうことか横須賀の通信学校に行かされたわけである。この時すでに飛行訓練を行う指南役としてのコーチ役はすでに戦死していて実在していなかったのでは、と後になって推測した。

ここからは当時の戦況を振り返ってみることにしたい。なお、日本通信教育連盟が発行した「昭和」という本からの引用である。

昭和18年に入って日本海軍の戦局は180度暗転した。

「昭和18年5月29日のアリューシャン列島のアッツ島玉砕、そして同年4月18日の連合艦隊司令長官、山本五十六が撃墜死された。とりわけ山本五十六の死は、「当時の海軍にあっては日本の死を意味するほどの衝撃を軍や宮中に与えた」という。

「昭和19年2月18日、トラック島日本軍全面敗北」、
「昭和19年7月7日、サイパン島日本軍の守備隊玉砕」、

「昭和19年10月25日、神風特別攻撃隊レイテ沖戦に出撃、敷島隊生還せず。昭和19年11月24日、米軍B29型爆撃機、東京を空襲する」など戦局は危機的な局面を迎えていた。

昭和20年4月7日、午後2時33分、巨大戦艦大和は米軍機によって撃沈される。日本海軍の敗北は大本営からは正しい発表はされなかった。

軍もはじめは非常に優秀な若者を採用し、OJTによって航空機の操縦技術のコーチなどはマンツーマンで行われていたが、昭和16年に12月8日、真珠湾攻撃によって開戦となった。

太平洋戦争は航空消耗戦となった。昭和17年4月からは1000名を超える採用をする。ベテランの兵士がどんどん戦死し、兵隊を大量に補給する必要があったのである。昭和18年10月入隊の第13期からは兵隊の採用基準が大幅に甘くなる。兵隊も質よりも量の時代に突入してゆくのである。

以降、学歴中学校3年を修了とし、全国の中学校からあ大量に募集して飛行機搭乗員や、中堅幹部養成の安易な「促成教育機関」となっていた。

戦局が猛スピードで坂道を転げ落ちるように悪化して行ったのは、古い海軍人の考え方にあった。

根強くあったそれは、航空戦力の重視というより、すでに時代遅れとなった旧弊な軍艦至上主義にあった。日露戦争時の東郷元帥の戦艦と戦う時代ではないのに、である。

時代の進歩はスピードを要求していた。山本五十六の航空隊優先の時代にあっては、時間をかけ、正しくパイロットの育成がさ

れたなら兵士はより安全に活躍することができただろう、と思う。

しかし、大量に募集された予科練の中から飛行兵でありながら爆装魚雷艇（震洋）、人間魚雷（回天）などの特攻兵器搭乗員に転科を命じられ、訓練のあと出撃した。もう戦える戦闘機が残っていなかったのである。

これからは日本はなぜ敗北したのか、一兵卒の立場から考えてみる。

①開戦を主唱する陸軍を、海軍は説得する努力も阻止もしなかった。もし開戦した場合、海軍は短期で終了させるといった申し合わせがあった。

②陸軍と海軍のコミュニケーションが悪かった。開戦前から物量的に海軍は敗北すると予測していた。

③海軍の少数精鋭主義の教育は実戦に合わなくなっていた。拡大する前線に投入される航空機は現実の戦争とはマッチングしなかった。

④暗号はすべて解読されえていた。

⑤海軍の艦船組と航空機組の方針が派閥意識が強く、はっきりし

なかった。航空機組の強力なリーダーシップがもっと欲しかった。

⑥日本海軍は戦闘能力では世界一であったが、人を育成し、どう使うかミドルの指導者が少数であった。実践指導者の不足による。

⑦教育・育成には、時間がかかるものという鉄則を忘れていた。

⑧飛行兵が特攻隊に充当された。非人道的な作戦であり、これは許されることではない。

⑨太平洋という島々に前線が拡大し、機材、物資の補給ができなかったために多くの戦力を失った。

⑩ 結語として。思いつくままに書いてみたが、航空機と搭乗員に対する体系的育成がもっと欲しかった。

参考資料 「日本の歴史の幕末の英傑」 暁教育図書

「昭和」日本通信教育連盟